

共生社会ホストタウン～一声かけるおもてなし～

平昌（ピョンチャン）冬季オリンピック・パラリンピックが盛況裡に閉幕しました。次はいよいよ、2020年夏の東京です。

その東京オリ・パラに関連して、国は新たに「共生社会ホストタウン」という制度を設け、昨年12月に初めて登録された6つの都市の一つに本市が選ばれました。主にパラリンピアン（パラリンピック出場選手）との交流をきっかけにして、障がい者などが積極的に参加できる共生社会の実現を目指したユニバーサルデザインのまちづくりや心のバリアフリーに関する取り組みの実施を促進しようというものです。本市では、今年9月に屋島レクザムフィールドにおいて、日本パラ陸上競技選手権大会が開催されることも決定しています。それも見据えて、「共生社会ホストタウン」を推進するための取り組みが始まっています。

2月下旬には、台湾からパラリンピアンなどを招へいし、小学生との交流や文化体験等の事業を実施しました。交流を終えて、子どもたちからは「障がい者の気持ちがあった」、「パラリンピックを見て応援したい」などの感想があり、障がい者やパラリンピックに関心を持ってもらう大きなきっかけになったと感じています。

また、「あすチャレ！アカデミー」という研修も実施しました。市職員を始め、市議会議員、観光等関連事業者、市民ボランティアなどの有志が参加し、自ら障がいがある講師から直々に障がい者とのコミュニケーションの方法などを学べた楽しくためになる研修でした。大切なのは、まず「お手伝いできることはありますか」と一声かけること。その講師が所属する会社の社長で日本ユニバーサルマナー協会代表理事の垣内俊哉氏は、著書の中で、「日本では設備のバリアフリーはどの国よりも進んでいるのに、高齢者や障害者への適切な向き合い方がわからない人が多い」、そして「無関心でも過剰でもなく、一声かけるといったさり気ない配慮が、文化として定着すればよい」と述べられています（注）。

意識におけるバリア（障壁）を取り払った誰もが暮らしやすい真の共生社会の実現を目指して、種々の取り組みを推進してまいりたいと思います。

（注） 「バリアバリュー 障害を価値に変える」（垣内俊哉 新潮社）